

◆◆◆ 南極オゾンホール

気象庁は9月13日(木)、米国航空宇宙局(NASA)の衛星データをもとに解析した結果から、8月中旬にオゾンホールが現れ、9月中旬現在は南極大陸をほとんど覆うまでに拡大していると発表しました。

オゾンホールは例年8月後半に現れ、9～10月に最盛期を迎え、11～12月に消滅します。オゾンホール形成の大きな要因はオゾン層破壊物質と気象条件です。大気中のオゾン層破壊物質の濃度は1990年代後半のピーク後も高い状態が持続していますが、今年はオゾン層破壊促進に関係する南極域上空の低温域(−78℃以下)の面積が昨年ほど大きくないことから、昨年ほど大きく発達せず、過去10年間の平均的な規模になると予想されています。

南極オゾンホールは、人工物質のフロン等によるオゾン層破壊が地球上で最も顕著に現れている現象です。今年9月16日、「オゾン層を破壊する物質に関するモントリオール議定書」の採択から20年目にあたります。この間の国際的な取組みの成果により、気象庁の観測でもオゾンホールの拡大傾向は2000年以降見られなくなりました。しかし、依然としてオゾン層破壊物質は多く存在し、世界気象機関(WMO)、国連環境計画(UNEP)によると、オゾンホールは今後引き続き数十年間は出現すると予想されています。気象庁は、引き続きオゾン層の状況を観測し、的確な情報提供に努めるとしています。

詳しい資料は、気象庁ホームページ(<http://www.jma.go.jp>)上の報道発表資料をご覧ください。
(<http://www.jma.go.jp/jma/press/0709/13a/ozonehole0709.html>)

また、気象庁では毎月「オゾン層観測速報」を発表しています。国内の毎月のオゾン全量や紫外線状況を解説するものです。こちらも気象庁ホームページ上の報道発表資料のオゾン層観測関連ページ(<http://www.jma.go.jp/jma/press/ozone.html>)からご覧いただけます。